

各公演のチケットのお申し込み・お問合せは、公式HPからのご予約も可能です。

<柏崎公演>
 5月16日(土) 14:30 OPEN / 15:00 START
 17日(日) 13:30 OPEN / 14:00 START
 【入場料】3,000円(予約受付中)
 会場: 文学と美術のライブラリー 游文舎
 新潟県柏崎市穂波町1番地25号 穂波第2ビル2F
 申し込み・問い合わせ先
MAIL fumiko-neo@view.ocn.ne.jp
TEL 0257-32-1238



<調布公演>
 5月23日(土) 13:30 OPEN / 14:00 START
 【チケット】3,000円(予約受付中)
 会場: MNHビル MNHシアター
 東京都調布市調布ヶ丘1-34-1
 MNHビル4F



<仙台公演> 共催/(一社)東北えびす 後援/仙台市
 5月30日(土) 14:30 OPEN / 15:00 START
 31日(日) 13:30 OPEN / 14:00 START
 【チケット】3,000円(予約受付中)
 会場: THEATER えびす



<つくば公演>
 6月6日(土) 13:30 OPEN / 14:00 START
 【チケット】3,000円(予約受付中)

会場: BARK STUDIO パークスタジオ
 茨城県つくば市天久保1-7-18 大和ビル2F
 ※松見公園すぐ近く。近隣にコインパーキングあり。
TEL 029-886-6500

【予約・問い合わせ】4会場とも受け付けております。
 井上弘久事務所
MAIL office-ih@googlegroups.com 「独演 椿の海の記～もうひとつのこの世をもとめて～」公式サイト
TEL 090-9846-1910 **https://www.tsubaki-dokuen.com**
 全国行脚公演2025-26 独演「椿の海の記」
 相模原 / 南魚沼 / 鴨川 / 東京 / 柏 / 北九州 / 水俣 / 大和 / 神戸 / 熊本 / 藤沢 / 柏崎 / 調布 / 仙台 / つくば……パリ 2026.11



公式サイトはこちら▲

2026 初夏 柏崎・調布・仙台・つくば公演

独演 石牟礼道子 原作 第五章「紐とき寒行」より

椿の海の記

もうひとつのこの世をもとめて

石牟礼道子を知っていますか？

生きとし生けるもの・命の切なさともぬくもりの記憶こそが、この災禍の時代の道標となる。今こそ、石牟礼道子の世界にお連れいたします。



題字：栗原光峯 舞台写真：高平雅由

出演・構成・演出
 井上弘久

コントラバス
 吉田水子(柏崎・調布公演)

※仙台・つくば公演は井上による
 カリンバ弾き語り公演となります。

仙台公演では両日もアフタートークがございます。

「独り舞台に籠めるもの」
 井上弘久 × 渡部ギョウ

2026年11月、パリ公演決定!

椿の海の記

石牟礼道子が描く自伝的小説の白眉！
4歳のみっちゃん（石牟礼道子）が暮らす九州の片田舎・水俣。そこで暮らす人々や神さまたちや時には妖怪も現れて……かつては日本のどこにでもあった昭和初年代（1930年前後）の光景が、すでに記憶の底に沈もうとしているかつての日本が、4歳のみっちゃんの目を通して今、「もうひとつのこの世」として鮮やかによみがえる。

第五章「紐とき寒行」について

「紐とき」とは今の七五三のお祝いのこと。南国・熊本の水俣にも冬が訪れようとしています。
オーピングは盲目の老狂女・祖母のおもかさまと若き女郎たちの、人目を引かずにはおかぬ道行き場面から。その祖母に縋りついて無人島へと連行しようとする官憲に、敢然と対面する父・亀太郎の覚悟とは。

さらには若くして死ぬ弟のこと、ハンセン病患者たちの寒行の様……生きることの悲しみが覆いかぶさるようなシーンですが、この命の切なさともぬくもりこそが石牟礼文学の魅力でもあるのです。

後半は麦踏みから始まって、冬の農作業のあれこれテンポよく語られてまいります。味噌の仕込み具合から、寒漬け用の大根が山の畑をぐるりと囲む木々の枝に干される景観は水俣地方の冬の風物詩でもありました。

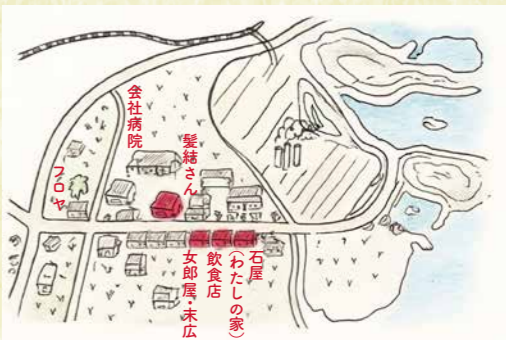
そして最終場面、夜の冬の町をさまよう盲目の祖母・おもかさまと、祖母に寄り添う四歳の道子みっちゃんの頭上に粉雪が舞い降りて……静かな静かな感動が舞台と客席を包み込んでまいります。



石牟礼道子 Michiko Ishimine / 詩人・作家 (1927～2018年)

熊本県生まれ。生後すぐに水俣に移る。1969年、水俣病患者の魂の声を描いた『苦海浄土』三部作の第一部となる『若界浄土』が水俣病を公表し大きな反響を呼ぶ。73年マクサイサイ賞受賞。その後『椿の海の記』『あやとり』など次々と作品を発表する。『十六夜橋』で紫式部賞、朝日賞、「はにかみの国」石牟礼道子全詩集で芸術選奨文部科学大臣賞、「祖さまの居」で現代詩花椿賞を受賞。

みっちゃんの住んでいた町



水俣市月ノ浦から不知火海を望む

三千世界の雪じゃわい

『椿の海の記』第五章「紐とき寒行」より

田中優子（江戸文学・江戸文化研究者）

「みっちゃんや、三千世界の、雪じゃわい」――夜になってさまよい出た祖母の「おもかさま」を道子がようやく見つけ、粉雪が舞いはじめるなかを、共に帰ろうとしたその時、おもかさまは、そうささやいた。

この言葉で、空間は突如、宇宙大に広がる。

およそ2メートル四方の舞台が宇宙となる。その世界に粉雪が舞う。

彼方からは、精神を病んで足も目も不自由なおもかさまを、いつもいたわってくれる遊女たちの声や、土俗の節の三味線の音が、かすかに聞こえる。

『椿の海の記』の中で、もっとも忘れ難いシーンのひとつだ。

「紐とき寒行」の「紐とき」とはかつての七五三のことで、病弱な弟の三歳の祝いの記憶を石牟礼道子が書いた章なのである。祝いの参道では、癩者（ハンセン病患者）たちが海につかって回復を祈る寒行が語られる。道子にはその参道が、見るからに弱々しい弟の姿と相まって、「人生のかなしみの道」のように思われる。

かなしみの象徴としてこの章の中心にいるのは「おもかさま」だ。左の足は象皮病に罹って異様に肥大しひび割れている。着物を引き裂きながら髪を振り乱して町を歩く「異形の者」である。天皇行幸があるというので、島へ隔離するよう警官が言ってくるが、道子の父は命をかけて拒絶する。その迫力も忘れ難い。

悲しみだけが覆っているのではない。狂った者に「殿」や「さま」をつけて「神経殿」や「ままんさま（ほとけ様）」と呼ぶ気持ちの中には、前近代社会が障がい者や病人を、この世とは別世界に暮らす特別な力を持つ者、別世を見ている者、と感して、畏敬の念をもっていたことが伝わってくる。

全編を「寒行」というテーマが覆っている。しかしその底辺には、さらに大きく深い、命のぬくもりが広がっている。道子はいつも、神経殿の「芯のあたたかい掌に撫でまわされると切ない気持がこみあげて」泣きじゃくり出してしまった、という。また、寒風吹く中での母親たちの農作業は厳しいながら、自然から命をもらって生きている人間の営みとして描かれる。

この命の切なさともぬくもりこそ、石牟礼道子が生涯、その存在の中心に置いてきたものであった。その切なさともぬくもり、その中心から見る水俣と不知火海の広がり、井上弘久の独演で痛いほど、伝わってくる。

田中優子 Tanaka Yuko

江戸文学・江戸文化研究者・法政大学名誉教授

江戸文学・江戸文化研究者で、エッセイスト、法政大学第19代総長。現在は同大学名誉教授。2020年に『苦海・浄土日本』石牟礼道子もだえ神の精神』を刊行。女性ならではの石牟礼道子論は説得力に富み、危機的状況を生き抜くための希望を石牟礼道子の著作から導き出す。

ごあいさつ

独演椿の海の記全十一章全国行脚公演も今年で四年目を迎えます。今年も第五章「紐とき寒行」で日本各地を巡っております。

二〇二五年六月の相模原公演を皮切りに、鴨川・東京・柏・北九州・水俣・大和と上演を重ねまして、二〇二六年は神戸・熊本・藤沢・柏崎……と巡っております。

そして二〇二六年十一月には、パリ公演を予定しております。

私自身まったく予想もしていなかったことでしたが、一年前の秋でした。「パリで上演する気はありませんか、日本で一推しの一人芝居と聞いています。」というパリの小劇場からのお誘いで、とにかくビックリしましたが……石牟礼道子の貴重な作品世界を海外に紹介できる絶好の機会だと、実現に向けて進んでゆくことにいたしました。

皆様にはこれまで以上のご支援・ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

二〇二五年十二月
井上弘久

井上弘久 Inoue Hirohisa / 俳優・演出家

1952年東京生まれ。1979年より劇団転形劇場（太田省吾 主宰）に所属。名作水の駅「小町風伝」などで、日本および海外各地の舞台を踏む。1990年より劇団U・ワールドを主宰。構成・演出をつとめる。同劇団解散後、2013年より文学作品を一人で舞台化する「朗読演劇」を開始。チャールズ・ブコウスキーの『町でいちばんの美女』カフカの『変身』で好評を得る。2018年より石牟礼道子「椿の海の記」全十一章の連続上演を開始。三年をかけて全十一章の上演を果たした後、現在その全国行脚公演を遂行中。



― 第五章「紐とき寒行」より ― 写真：古軸 泉

「椿の海の記」を深い解釈と敬意を持って、たった一人で演じる舞台

谷津賢二（映画監督／カメラマン）

私が尊敬する俳優・演出家である井上弘久さんの独演会を紹介します。井上さんは劇団『転形劇場』で鍛えられた方、その演技に凄みさえ感じさせる俳優です。

井上さんが人生を賭して演じる舞台があります。それが作家、石牟礼道子さんの物語世界。石牟礼さんが記した「椿の海の記」を深い解釈と敬意を持って、たった一人で演じる舞台です。

幼き石牟礼道子さん「みっちゃん」と、祖母で狂女だった「おもかさま」のやり取り。人間の温かく底しれぬ深淵を覗くかのような世界を井上さんが身体と言葉で表現。生類につながる世界を、一人の人間が私たちの眼前に幻出させる傑作です。

私たちは今、為政者たちの無惨な姿を、日々目にせざるを得ません。そんな中で接する石牟礼道子さんの世界は、疲弊した人心への「解毒剤」だと感じるので。むき出しの欲望をまとった人間が跋扈する世界と対局にある石牟礼道子さんの世界。人の痛みを知り、もだえながら生き、命を尊び、人と自然が同じ地平で生きることが大切なのだと、井上さんは演技で石牟礼さんの言葉を表現するのです。

石牟礼さんを知る方も、触れていない方もぜひ井上さんの舞台で深遠な世界に浸ってみてください。

谷津賢二 YATSU KENJI

映画監督／カメラマン

1961年、栃木県足利市生まれ。立教大学社会学部卒業。94年に日本電波ニューズ入社、95年から98年までハノイ支局長を務める。アフガニスタン・パキスタンで中哲医師の活動を20年以上記録し、ドキュメンタリー映画『荒野に希望の灯をともし』を発表。観客動員が16万人に達してなお各地で上映が続いている。